

# 結核テーマに感染対策勉強会

城西病院の院内感染症対策委員会の勉強会が12月8日、城西総合健診センターで開かれました。講師は、日本の感染症医療パイオニアとして活躍されている聖路加国際病院の内科部長、感染症科の古川恵一先生を招きました。

講演では、日本の著名人と結核とのかかわりについて触れ、古川先生は「日野原重明氏（聖路加国際病院名誉院長）は若い時に結核にかかったが、104歳の今でもお元気。日本は先進諸国の中でも結核患者の発生が多い」と前置きし、なぜ結核患者が日本で多いのかを分析、世界的にみると南西アジアやアフリカでは依然として結核による死者が多い現状などを話しました。

引き続き、結核菌の感染ルートや発病の状況、検査方法などを紹介。「0歳から14歳の小児の発生リスクが高く、感染後に時間が経って発病する二次結核は高齢者が免疫力の低下する基礎疾患がある時に起きる。結核は感染と発病を分けて考える病気で、400人が結核菌に曝露した際に感染するのは100人。感染者のうち5人が発病し、残り95人は非発病で、そのうち5人が数カ月から数十年後に二次結核を発病する」と解説しました。

院内感染を防ぐために古川先生は「疑わしい患者は、呼吸器隔離をして3回痰の塗抹検査を行う。呼吸器隔離の方法は、まず個室、陰圧室に収容し、ドアを閉めておく。1時間に6回以上の室内換気を行い、室内に入るとすべての医療従事者や見舞いの人は結核用マスクを装着し、患者は室外に出るときにはサージカルマスクを着用する」などの対処法を示しました。



**古川恵一先生**  
聖路加国際病院内科部長。1978年新潟大学医学部卒。1986年～88年、カリフォルニア大学サンフランシスコ校感染症科クリニカルフェロー。日本感染症学会の認定感染症専門医、評議員

## 大切な早期診断、早期治療

「結核は決して珍しい病気ではない。と注意を喚起する古川先生。「結核性髄膜炎は、発見が遅れて死亡につながるケースもある。早期診断、早期治療が大切」と訴えました。また、会場から妊婦の結核罹患について質問があり、「妊娠中も結核治療をしつかりとする。9カ月以上投薬し、無事出産したケースも経験している」と答えました。

平成26年12月8日

